

## B部門 優秀賞 作品 No. 58

### ねじが教えてくれた小さいものの重要性

李錫敏(リ・ソクミン)

私は、2005年に来日し、現在慶應義塾大学大学院の博士課程で外交史を研究している韓国人です。ねじとは全く関係がない外交史を研究している者が、しかも、韓国人が日本のねじに関連して何のエッセイを書こうとするのかといぶかしむ方もいると思います。しかし、韓国での経験ですが、私の経験の中でねじに関連したある経験が自分の研究に非常に大きな影響を与えたと考え、それを皆に紹介したいと思いこのエッセイを書くことにしました。

これを読む皆さんも知っていると思いますが、韓国人の男性には兵役の義務があります。心身が健康であれば誰でも軍隊に入り、約2年間兵士や将校として兵役の義務を果たさなければなりません。私も2002年11月から2年間兵士として兵役の義務を果たしました。私が書こうとするねじに関連した経験はその時のことです。

軍隊に入ると初めて受けるのは基礎軍事訓練です。銃の使い方や拳手の敬礼のやり方、生活規則など兵士として必要な全てをこの訓練で習います。それが終わったら主特技教育を受けます。主特技とは、行政・補給・整備・医務・輸送・情報・通信など、基本的な軍事任務以外に各々の兵士の能力や特性に合わせて与えられる任務のことで、その任務が与えられた兵士はそれを遂行するために必要な教育を受けます。私に与えられた主特技は補給でした。補給とは、軍事作戦や訓練の遂行上、そして、部隊の運営上必要な全ての物資を請求・支給・管理する仕事です。私はこの任務を遂行するために総合軍需学校というところで2週間関連教育を受けた後、自分が生活する部隊に配属されました。

これから自分が2年間生活する部隊に配属されたばかりの兵士は誰でも幼稚園児と同じです。どこに何があるか、何をすればいいのか全く分かりません。基礎軍事訓練と主特技教育を受けても、それはどこまでも一般教育であるため、実際の部隊生活では何をどうすれば良いか全然分からないのです。各々の部隊は固有の任務を持っており、配属されてから全て一から十まで習い直さなければなりません。私も同じでした。仕事のことは言うまでもなく、一人では食堂にも、トイレにも行けない状態でした。しかし幸いなことに、私の前任兵は皆優しく、生活のことも仕事のことも親切に教えてくれました。特に、補給業務の教育を担当した前任兵は、必要な物資の請求から管理に必要な要領まで懇切丁寧に教えてくれました。そのおかげで、私はすぐ部隊生活に慣れることができました。

しかし、問題もありました。それは、私の補給業務の教育を担当していた前任兵の除隊があまりにもはやかったため、私が補給業務を完全に把握することができなかったことです。私はそれがずっと不安でしたが、しばらくの間は何の問題もなく過ごすことができたため、そんな不安も徐々に忘

れるようになりました。しかし、部隊が大規模な訓練を実施することになったとき、問題が起きました。

私が勤務している部隊は砲兵部隊であり、年に何回か大規模な砲撃訓練を行います。それは部隊にとって非常に重要な訓練であり、小さなミスも許されません。そのため、砲撃訓練のためには準備しなければならないことがたくさんあります。特に重要なのが通信装備です。砲撃は長距離射撃であるため、全ての連絡が通信装備を通して行われるからです。私の補給業務の中にはその通信装備に必要な部品の発注・支給も含まれていました。

訓練が迫ってくるある日、通信を担当している将校から通信装備の修理に必要であるから何種類かのねじを請求するように言われました。その将校は必要なねじを持ってきて私に見せました。その時、私は正確にねじを確認もせず、見本のねじに似ているものを教本から探しそれを発注しました。そして将校には無事に発注を完了したと報告しました。そして、訓練の数日前に上級機関からねじを支給してもらいました。

しかし、渡されたねじは通信装備の修理に必要なねじではありませんでした。見本とそれとでは長さも頭の形も別のものだったのです。私が間違ったねじを注文したせいで通信装備を修理することができなかった私の上官は、結局他の部隊から同装備を借りて訓練に参加するしかありませんでした。私はその時になって初めて自分の犯したミスの大きさに気づきました。そして、その将校が訓練から復帰したら怒られると、そして処罰を受けることを覚悟していました。

予想通り、私はすぐに将校に呼ばれ、これで私の軍生活は苦労の連続になるだろうと思いながら彼がいる通信課に行きました。私がドアを開けて部屋に入ると、彼は椅子に座っていました。そして彼の前にある机の上にはいくつかのねじが置かれていました。最初に彼が私に見せたねじと、私が支給してもらったねじが並んでいました。それをみた私はとても緊張し頭を下げたまま自分にくだされる処罰を待っていました。しかし、その将校は私に怒りませんでした。処罰の話もしませんでした。その代わりに彼はねじの説明を始めました。私が注文したねじでは何故装備の修理ができないか、ねじの種類、その用途、頭の形から長さ、直径、材質の差によるねじの特徴まで。そして、彼が最後に言い出したのは、ねじのように小さいものを、人は気にもかけず、忘れていても知れないが、それがいかに重要であるか。その時彼が話したことはあれから8年経った今でも私の中に残っています。

その将校の話は私の軍生活のみならず、その後の日本での留學生活、そして研究にも非常に大きな影響を与えました。特に、私の研究において彼が教えてくれたねじの重要性、小さなものの重要性は大きな意味を持ちます。つまり、外交史の目的は、小さな部分が与える大きな影響を明らかにすることであり、重要な外交政策、文書、政策決定における核心的な人物などをいくら分析しても問題の核は見えてはこないのです。

歴史の中で何が行っていたのか。ある事件の原因は何だったのか、それをより明らかにするためには、小さな部分に対する分析を行わなければなりません。例えば日米間の時差、ある情報を担当者が確認した時間、核心的な人物の周りにいた人々の考えや言動など、普通に見逃してしまうような小さなことが実は非常に大きな影響を与え、結果として思いもよらない結果をもたらす場合が少

なくないのです。このようにねじが教えてくれた小さなものの重要性は、私にとって非常に大きい意味を持つこととなりました。

先述したように、私はねじのことはよく知りません。ねじがどのように作られるか、どのくらいの種類があるか、そのような基礎的なことも知りません。しかし、私はねじがどのくらい重要であるのかはよく知っていると思います。ねじは脇役であり、主人公ではありません。そして、いつまでも主人公にはなれないかも知れません。しかし、脇役であるからこそできる役割があり、それは主人公より重要で大きい意味を持つかも知れません。そして、私は研究の中で実際主人公より脇役が結果により大きい影響を与えた場合を歴史から確認しています。

最後に、私にはそのような資格がないことは知っていますが、ねじに関連する仕事に従事している方々に一言送るならば、ねじが重要性を常に意識してこれからも頑張ってもらいたいということです。ねじは小さなものですが、それが持つ重要性は小さなものではありません。そして、ねじが我々に教えてくれるのはそれだけではありません。日本語で『ねじが緩む』ということが『緊張がとけてだらしなくなる』ことを意味するように、ねじは人間の軸としての意味もあります。このようなことを考えながら、ねじ業界に従事する方々の軸がしっかりしていけば、日本の明るい未来を支えていくことになると確信しています。